

かも 市史だより

平成13年10月
No.4

編集発行 加茂市幸町2丁目3番5号 加茂市教育委員会市史編さん室 ☎0256(52)0080 内線480



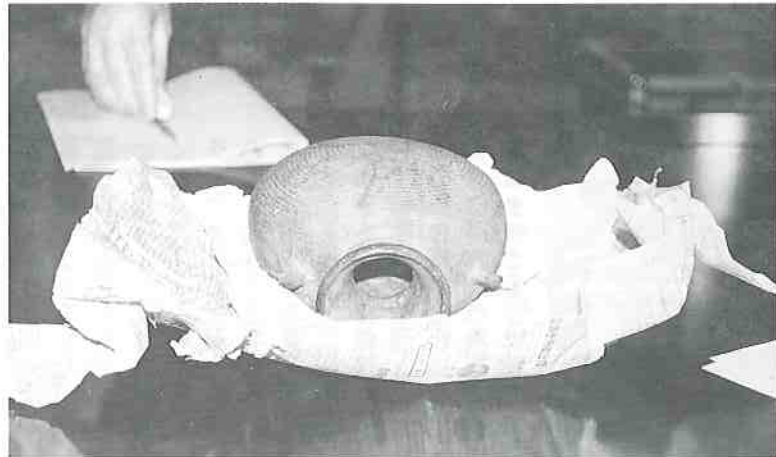
▲須恵器提瓶



▲発見時の様子（古新聞に包まれた木箱に納められていた）



▲箱裏書き



▲口の部分から見たところ（扁平な形状を示す）

古墳時代の祭器発見（青海神社）

七月末に青海神社所蔵の資料を対象に夏期総合調査が行われ、数多くの資料の中から古墳時代後期（六世紀後半）の須恵器の提瓶が見つかりました。

須恵器は、登り窯を用いて焼かれる焼き物で、その当時は、近畿・東海地方などの限られた地域で生産されていたものです。交易などを通じて当地に持ち込まれたと思われます。提瓶は高さ二十センチ、銅鑊状の扁平な円形で、肩に取手が付けられています。各地の出土例では集落よりも古墳（お墓）から見つかることが多い、死者を葬る祭祀に用いられたと考えられます。

明治四十二年（一九〇八）に箱が新調されており、蓋表に「古代酒器入土中発掘所獲」、裏に漢文と「漆漆書院主人」の雅号が記されています。出土地を特定し、伝来の経緯を示す記述は見られませんが、近隣の古墳からの出土品が奉納された可能性が考えられます。

市内では、福島古墳群（五世紀か）のほか、千刈遺跡（八世紀）などの集落跡が確認されています。今回発見された須恵器は、周辺遺跡との関連も含め、加茂の古墳時代を考える大きな手がかりとなる遺物です。

（考古・古代・中世部会 尾崎高宏）

七谷地区の紙すき

古来製紙業の発達した越後の中でも、七谷は加茂紙の産地として名を馳せていました。ここではその工程と歴史を追ってみます。

歴史とその背景

七谷地区の生業では紙すきが最も重要でした。生業は地域の風土と関わりが深いものです。紙すきには原材料の楮が必要ですが、これは他地域から仕入れることができます。

しかし紙すきに必要なきいな水と大量の燃料が身近になければならず、七谷地区はその自然条件に恵まれていました。

七谷地区の紙すきの歴史は古く、江戸時代後期にはすでに「加茂七谷二千枚一束二百枚」の呼称もあって近郷に多く出まわっていました。加茂紙（七谷産の紙）の歴史についてはまた別の面から調査が進められるでしょうが、ここでは加茂市民俗資料館に収蔵展示してある紙すきの道具から、かつての紙すきの仕事のあらましを述べてみましょう。

作業行程と手順

紙すきの工程は大きく分けて、①材料の準備と下ごしらえの仕事、②紙の原液を紙すきフネ（木槽）に仕込む作業、③紙をすく作業、④乾燥・仕上げ、の手順で行われます。楮は木のまま大きな釜で蒸して皮をむき、水の流れに浸



▲写真4 テアツタメ (手温め)

した後に、楮タクリをします。写真1の藁で作ったナデを台にして、2のナデ包丁でナシ皮（表面の黒い皮）やアマ皮（青緑の皮）を削り取り、真皮だけにするのがタクリです。真皮に虫喰い跡や節などのきずがあればキズトリ包丁で丁寧に切り取り、紙になる繊維だけを選び出すようにしました。その後には雪晒しをしたりもして干しました。紙はすくまでの下準備の手間のかかる仕事でした。

つぎは下ごしらえした楮の繊維を柔かくして、どろどろの液にし、フネに仕込みする仕事となります。下ごしらえ

した楮を煮て苛性ソーダ等を入れて漂白したあと、それを堅木の板の上のせて写真3の棒で叩き繊維を細かく砕き柔かくします。この棒を一般に叩き棒といいますがパイとかパイという人もいます。叩いたものを植物から採取したネリという糊の役割をする液と水を混合して、一緒によくかくはんして紙すきのできる状態にします。

紙すきは冬の仕事で、気温が高いとネリが弱くなり、上質の紙になりません。冷たい液から紙をすくので、スキコ（紙をすく人）の手は感覚がなくなり、そこで写真4のテアツタメ（手温め）のなかの湯にときどき手を入れて温めます。小さな風呂形ですの手掘風呂ともいいます。すきあがつた紙は水抜きをして乾燥板に貼って干します。その際に紙がしわにならないように写真5のハケで紙を丁寧になでるようにして貼りま

す。また乾燥した紙は用途の規格に応じて裁断し商品化しました。写真6の断ち包丁と7の断ち台は障子紙等の裁断に用いました。またチリ紙やナシ紙（梨の袋用の紙）の裁断には大量にまとめて切るのに都合のよい写真8の断ち鎌を使用しました。断ち台は大きなもので押え板の上に人が乗って鎌を引つ張りあげるようにして紙を断ち切ります。

紙すきは時代が新しくなると仕事が機械化され、材料も多く必要になり、地元産では足りずに長野県等から仕入れたりしました。チリ紙等は原料に紙くずを用いたりもしました。多くの古文書がチリ紙に再生され、そのため加茂市には古文書の残存が少ないともいわれています。紙の生産には紙問屋の存在も大きかったようです。これらのことは今後の調査のなかで深めていく必要があります。

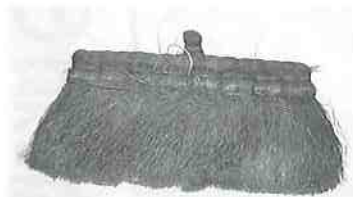
(民俗部会 五十嵐 稔)



▲写真1 ナデ(上)と写真2 ナデ包丁



▲写真3 叩き棒 (パイともいう)



▲写真5 ハケ (刷毛)



▲写真6 断ち包丁(上)と写真7 断ち台



▲写真8 断ち鎌

かも私史

今年の猛暑はすさまじいものです。花の水やりをしながら道路に水を打ちます。一瞬そこから涼しい風が生まれ、日本の夏の風情をしみじみ思います。



黒水中
鶴巻 帛子

いまむかし

しかし今は一瞬の涼風を味わう大人も子供も通りません。この界限も寂しくなりました。通るのは時たまの車だけです。旧七谷郵便局などが加茂市の有形文化財の指定を受けてより尋ねてくるお客さんがポチポチいます。その方々との会話は楽しく、少しでも多くの人々が往来する道であってほしいと願います。

先日、若者二人が尋ねてくれました。私は喜び話します。「この道は殿様街道と言って村上や村松の殿様の江戸参勤交代の通路だったんだよ。戊辰戦争のときは官軍が会津米沢村松の連合軍を追撃して人馬が疾走した道でもあるの。加茂川は筏が流れ材木がどんど



▲殿様街道脇の庚申塚と寒倉供養塔(上黒水)

ん下って行ったんだって。淵のあたりは急な曲がりだから難儀そげだったけど後は流れにまかせ、いい声で唄など歌って気持ちよさそげだったんだって。河原に布団干しながら見てたりして。

蝙蝠が飛んで日が暮れる頃、下の方からチャリンチャリンと音がする。背中に鎖の束をかついだ、蓑を着た筏師の一団が帰って来る。

すると遊んでいた子供達が「ツアア」あるいは「おと」と言って遊びの輪を離れ、蓑につかまり、父親に手を引かれて一人、二人と帰って行く。夕ごはんは、ご飯味噌汁つもの。煮豆。みんな母親の手作りです。

ちなみにおやつは、桑の実・イタドリ・すっかす・梅干し。生味噌つけたにぎりめしなど最高!

田舟の昔ばなし



加茂新田
齋藤 徳市

今から七十年前(昭和六年)に私は母の実家石井造船所で舟大工の仕事をして、昭和二十五年頃まで木造川船や稲積み舟を専門に造りました。終戦後耕地整理が実施され、曲りくねった堀や泥池が埋め立てられ立派な農道となり稲の運搬も車に替りました。当時舟は重要な農具で、專業農家は二艘や三艘は所有しその数は大変な数でした。今日ではその影すら見ることが出来ません。販売先は遠くは弥彦近

くの井田や源八新田、佐善。中之口村では井随、道上、打越。三条郷の鶴田、塚野目、栗林、柳川地区。近くは加茂郷、田上、小須戸郷などを得意として、年間田舟で約百二・三十艘も製造し、他に修繕などで近郷では比較的大手の経営でした。

私も業者は、川船以上の大舟を船と書き、俗に「三パ舟」という稲積み用の三間半の舟と土を均す七・八尺の小舟「吉惣舟」(土均し舟ともいった)を舟と書く習わしでした。長さは同じ三間半でも、底板の巾と深さで大小が決められ、何処の村と言えは寸法がわかりました。

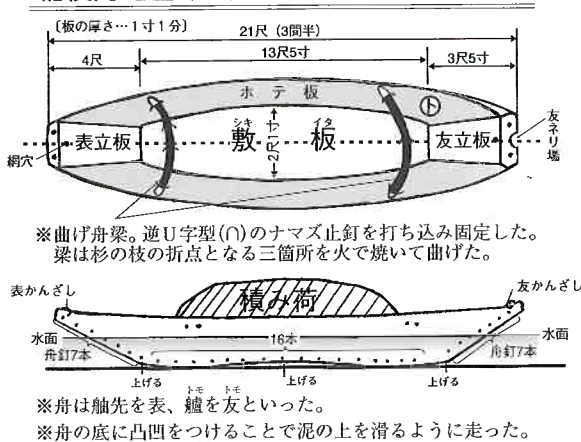
尚造船所も三条では由利と

田島、西蒲原では熊の森、長島、板井、大野、酒屋、平島、新潟など、私の記憶で二十数軒あり、人の数は百人を超えたとおもいます。

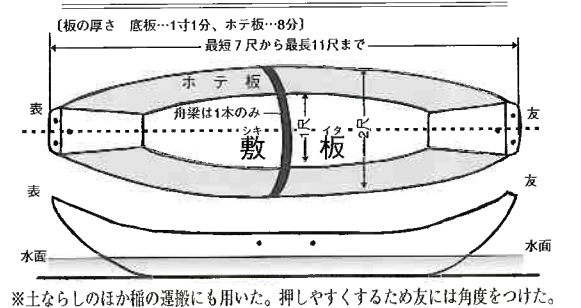
田舟は八月末から十月迄約二ヶ月が最盛期で、あとは舟の組立までの下造りで、大変広い場所が必要でした。お盆過ぎに注文が殺到するので大野方面から職人の応援を頂く程でした。

木造船を造った経験者として近郷で只一人生き残った私船の図面、寸法など書き残して置きたいと思っております。取敢ず田舟の略図を書きまします。

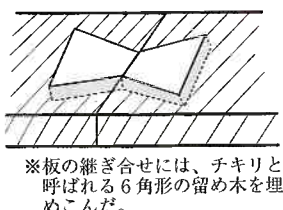
稲積舟略図 (三間半なので俗に三パ舟といった)



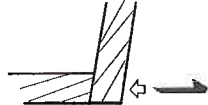
吉惣舟略図 (吉惣という人の考案らしい)



板の継ぎ合せ方



舟釘の打ち方



凡例

1間 = 6尺 = 約1.82m
1尺 = 10寸 = 100分 = 約30.3cm



▲月夜の番角風呂屋 平成4年まで新町で営まれていたお風呂屋さん。脇の小路を通るとカーンコンと、なんと暖かい音がしたものだという（昭和37年3月5日）

周辺は変貌し、現代に生きる私たちは、もう二度と同じ景色に触れたり、記録したりすることができません。こうした光景を見たことがなく、したがって追憶の中で想像することもかなわない新しい世代も増えています。

地域史のように、その土地独自の伝統はあっても比較的狭い範囲の歴史を扱う際に生ずる困難のひとつに、慢性的な資料不足が挙げられます。古代史などは特にそうで、地域によっては風土記や戸籍、荘園絵図や多量の木簡が残存しているところもありますが、全国的に見ればむしろ例外といつてよいようです。加茂市においてもその例に漏れず、昔から長く住民を悩ませてきた水害など

古いものは
ありませんか



▲保明新田から見た加茂川の景観 河川改修以前の、川幅は狭く左右に蛇行した様子が描かれている（昭和35年3月23日）



▲定光寺橋 当初寺参りをするため造られ、のち町が管理するようになったのだという。昭和44年の水害で流失し、再び架橋されることはなかった（昭和37年頃）

されていたようです。どこかにその束が眠っていませんか。市史編さん室では昔の加茂の様子を窺うことのできる古い資料を探しています。日本では不思議なこと、過去にどれだけ多くの資料が発掘されていてもなお、絶えずどこからか未知の資料が現れ、従来の歴史研究に厚みや別の視点を加えてくれるといえます。加茂市史でもぜひそうありたいと願っています。みなさまからの情報をお待ちしております。

このたびの市史編さんで調査の対象となるのは、考古遺跡やその遺物、古代から現代までの歴史文書、有形無形の民俗・生活資料から美術品や建造物といった文化財まで多岐に渡ります。ぜひ本紙をお読みのみなさまには、自分は歴史的文物とは無縁だなどと思わずに、一度たんすや物置、蔵の中へ入って忘れかけた何物かを探していただければ、と切望しています。

さて、ここに掲載したスケッチには、昭和三十年代の、今となつては姿を消してしまつた建物や風景が描かれています（本間正氏画）。いずれもある時期までは物珍しいわけでもなく、ごく日常的に目にする風景であつたことでしょう。しかし周辺は変貌し、現代に生きる私たちは、もう二度と同じ景色に触れたり、記録したりすることができません。こうした光景を見たことがなく、したがって追憶の中で想像することもかなわない新しい世代も増えています。

例えば石器や土器。以前に変つた形の石などを道端や畑で拾つて、物珍しさからそのまま所持しておられる好事家の方が時折おられるようです。そうしたものがおありでしたら一度拝見させていただきませんか。また昭和の始めころ、加茂市域を中心に「中央タイムス」という地域新聞が発行

編集会議終わる

毎年夏に開いている編集会議が、今年も七月二十九日(日)に行われました。普段専門分野別に活動している加茂市史の委員が唯一全員顔をあわせて協議できる機会です。ここで互いの報告を聞きあつて刺激を与えあつていくのです。

この日は考古の委員より加茂市内で最古の可能性のある遺跡の存在が報告されたのを始め各部会から最新の成果報告がなされるとともに、互いの今後の健闘を誓い合つたのでした。

「レポート加茂市史」発行のお知らせ

市史編さんの各方面での調査は資料編と通史編、それに地域の歴史編に結実する予定ですが、その前に中間報告的な意味合いも含めて「レポート加茂市史」を発刊します。市史編さん事業の発足から二年間で新しく分かつた知見・卓見が収録されることになっています。

詳細は後日広報等でお知らせする予定であります。ご期待ください。なお、「レポート加茂市史」は今後とも年一冊の続刊を計画しています。

編集後記

「市史だより」もはや第四号の発行を迎えました。この間県内はもとより県外まで調査は及び、資料編の発刊開始を睨みながら資料の蓄積が重ねられていきます。比例するようにならぬ方面からの情報提供も次第に多くなつてきました。今後の調査に期さねばならない課題が増える一方の現状に、嬉しい悲鳴をあげている昨今です。

市史編さんについてご意見・ご要望がございましたら市史編さん室までお寄せください。今後の調査活動に生かしていきたいと思ひます。